

沈黙する生きものたちが語ること

ながれ

鶴田 由美子（つるだ ゆみこ／公益財団法人日本自然保護協会 事務局長）

イヌワシの減少で天狗が絶滅の危機に

山奥の森に棲む魔物として伝説や能に登場する「天狗」。大きな羽団扇^{はうちわ}を振りかざし、その飛行能力や風を起こす霊力を表してきました。能の舞台で天狗が持つあの羽団扇の大きな羽根は、イヌワシやクマタカなどの大型のワシやタカの尾羽が使われています。600年の歴史を持つ能では、各流派の家元が代々、装束や道具を受け継ぎ、現在もその精緻なつくりを見ることができます。中には江戸時代につくられたと記されたものもあり、傷んだ際は修繕をしながら大切に使い続けています。

4年ほど前、能や歌舞伎など伝統芸能の道具の継承、復元を研究されている方が、イヌワシやクマタカの繁殖地の森林の生物多様性復元活動をしている我々、自然保護団体に相談にいられました。「羽団扇に使われているワシの羽根は、今、どうしたら手に入るのか。折れたときに修理や新調したくとも、羽根の入手方法がわからない」というのです。

日本の大型の猛禽類の仲間は、残念ながらほとんどの種が絶滅の淵に立たされています。羽団扇に使われているイヌワシ、クマタカなどは「種の保存法」で、捕獲はもとより生死を問わず、羽根1枚に至るまで売買や譲渡が禁止されています。飼育下の個体であっても、野生生物の保護や、保護増殖の研究などの目的で環境省から承認を得ないと、譲渡も貸与もできない希少種なのです。

たとえば日本のイヌワシは、現在、500羽足らずといわれ、繁殖成功率はたったの2割と、超少子化が進んでいます。減少の原因は、餌不足。日本の森がうっそうとしたスギやヒノキばかりの人工林に成り代わり、羽根を広

げると2mにもなるイヌワシが狩りをできる場が減ったうえに、ノウサギなどの獲物が減少し、ヒナが育たないのです。

この状況では、能楽師の方が日本産の大型猛禽類の羽根を手に入れることは絶望的で、今ある羽団扇が壊れたときには、天狗は大きなワシの羽団扇を持たず霊力を表すにも事欠き、登場できなくなるかもしれない…。伝統芸能の分野では、他にも鯨の髭やべつ甲など自然由来の材料が、生きものの絶滅危機で入手困難となり、つくる技術も廃れ、道具や衣装の継承の危機を迎えています。

「永遠に沈黙する」生きものたちの急増

レイチェル・カーソンの「沈黙の春」が日本語訳で出版されたのは1964年、前回の東京五輪の年でした。2020年は再び東京五輪の開催予定ただけでなく、地球の生物多様性の損失抑止が世界中でどれほど進んだかを検証する、愛知目標の達成年でした。国際機関から地球規模の評価レポートが相次ぎ発表されましたが、厳しい現状が記されています。「人間の活動により、地球全体でかつてない規模で多量の種が絶滅の危機に瀕している。」「800万種（うち75%は昆虫類）の生物のうち、100万種が絶滅の恐れがある。」「野生動物の個体数は1970年に比べ、3分の2以上減少し、2010年以降も減少が続く。」

これらの数値は漠然としています。このまま「永遠に沈黙する」生きものたちの急増が続けば、確実に私たちの暮らしや健康にも甚大な影響を及ぼす、という評価です。

実は日本でもイヌワシやクマタカが棲む奥山だけでなく、身近な里山でも生物の急減が

深刻な状況にあることが分かってきました。里山は国土の約4割を占める重要な生態系ですが、2005年から行われてきた全国の里山市民調査「モニタリングサイト1000里地調査」では、チョウやホタルなど身近な多くの生物種の急減が明らかとなりました^(*)。鳥類ではハシブトガラス、ヒヨドリ、ツバメなど、哺乳類ではノウサギやテンなど、普通に見られていた動物が減少しており、特にチョウ類は約4割が10年あたり30%という速度で急減していました。人知れずチョウなどの昆虫や、身近な普通種の種類や総量が減り続けていることが、日本でも世界と同様に起きているのです。

揺らぐヒトの健康、文化、経済の基盤

太古の昔から人類は自然界の恵みから栄養を摂取し、近代の農林水産業も自然の循環を利用し栽培、養殖をしてきました。現代では75%の食料が、自然界の昆虫などの受粉の働きによって生産されています。もしも花粉を運ぶ生物が失われたとき、その被害は甚大で、多くの作物が生産できなくなるばかりでなく酪農や養殖にも影響が及びます。また、多くの動植物が、餌資源や繁殖のために大量の昆虫に依存しているため、昆虫の激減は連鎖的に他の動植物の絶滅を加速させています。

昆虫に限らず、生物の危機を招く最大の要因は、ヒトによる土地改変や環境利用の変化です。75%の陸地、66%の海洋環境が改変され、過剰に採取され続け、気候変動の影響でも動物の47%が負の影響を受けています。ヒトや物のグローバルな移動に伴い、侵略的な外来生物が拡散し、化学物質やプラスチック汚染は、ヒトの健康を含め、生物界に長い間影響を及ぼし続けています。さらに、これまでヒトと地域の自然の間で、遺伝的にも伝統知としても保たれ続けてきた持続的な関係が無視され、開発や過剰利用が進んでいます。そのため野生生物や未知のウイルスや細菌

との遭遇が増大し、covid-19のような感染症のパンデミックのリスクを高めています。健全な生態系が保全され、ヒト社会の距離が適切に保たれない限り、ヒトは自然の恵みを損ない健康も脅かされ、社会的な活動ができなくなります。当然、経済を回すことも文化の継承もままならなくなっていく一、そういう事態が現実となってきたのです。

羽団扇の話に戻ると、相談を受けた我々は、能楽の分野の方々や動物園の方々とともに、絶滅危惧種の現状と自然由来の伝統芸能の道具の危機について、一緒に警鐘を鳴らし保全の取り組みを進めることになりました。イヌワシの保護増殖を行っている動物園の協力で、抜け落ちた羽根や不慮の死亡個体の羽根を収集し、生物文化多様性保全の研究や普及啓発活動を行っています。能楽師の方からは、「今、この羽根が入手できない現実に直面し、我々も意識が変わった。能楽は日本の自然に育まれた風土の中に生きる人々の、祈りや祭りを映したもの。健全な自然が失われ威厳あるワシやタカたちが減り、伝統芸能や道具の継承にも危機となっている。一緒に守る必要があることを、能を通じて伝えていきたい」そう、力強く語っていただきました。

我々はこうした分野を超えた協力を加速し、生物界の危機はヒトの社会の基盤の危機と一体である実感を広め、日常かつ劇的に意識と行動を変えていく必要があります。たとえば、日本は農薬の使用基準や脱プラスチックでも、欧州だけでなくアジアの国々からも遅れを取っています。つくる側もつかう側もヒトと生態系の健康を最優先に考え、自然環境に負荷の少ない産物や手段を選択し続ける。あらゆる分野が協力して損なわれた生物多様性を回復し、自然の恵みの循環の範囲で生きる一、その選択肢しかないことを、沈黙した生きものたちから学ばなければなりません。

*モニタリングサイト1000里地調査2005-2017年度とりまとめ報告書 <https://www.nacsjor.jp/media/2019/11/17887/>